

平成24年度 清水町教育委員会の活動状況に関する 点検・評価報告書

点検・評価の概要

教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、毎年、事務の管理・執行の状況について点検・評価を行い、その報告書を議会に提出するとともに公表することが義務付けられています。

また、その際、客観性を確保する観点から、教育委員会以外の学識経験者による知見の活用を行うこととなっています。

清水町教育委員会としては、この点検・評価を、本町の教育資源を有効活用し効果的な教育行政の推進を図るための確認の機会であると捉えるとともに、住民への説明責任を果たすことができるよう進めていきます。

評価対象は、年度当初に示す教育行政執行方針に基づき実施する事務事業のうち、本町の教育行政として特色ある事務事業としました。

また、点検・評価報告書の作成にあたっては、選定した事務事業の推進状況を自己評価し、外部知見の活用として学識経験者から意見をいただき、今後の教育行政に活かすこととしています。

なお、報告書は毎年度議会へ提出し、公表します。

学識経験者として、北海道教育庁十勝教育局及び前社会教育委員長からそれぞれご意見をいただきました。

点検・評価した項目

清水町の教育行政の中で特色ある事務事業として次の8項目を選定しました。

- 町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進
- 全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組
- 就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進
- 「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組
- 生活習慣を身につける生活向上推進事業
- 清水の子ども にこにこプラン事業の取組
- 地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業
- 子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

現状と成果

清水町教育理念「心響」～打てば響く 心に響く～を基軸として、「心を通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育の推進」を目指し、実践指標 “しみず「教育の四季」”を平成18年4月に宣言してから7年になりました。以来、家庭・学校・地域が連携して、「あいさつ、返事、後片付け」「早寝、早起き、朝ごはん」など、主として子どもたちの基本的な生活習慣の定着を図るための取組を展開してきました。本年度についても、4月に推進協議会を開催し、前年度の実践の成果と課題を踏まえた中で、町民が一丸となって子どもたちを守り育てる“しみず「教育の四季」”の取組を推進しました。

本年度の主な具体的な取組としては次のとおりです。

4月に「教育の四季」リーフレットを町内小中学校及び保育所・幼稚園を通じて家庭に配布する。中高連携としてのサイエンス・サマースクールを開催する。「子どもフォーラム」を開催し、町内小中高の児童生徒による「いじめ、あいさつ」についての意見交流を行い、各種団体代表者からの指導・助言を受ける。町内各保育所や幼稚園の保護者参観日に「教育の四季」の趣旨や取組について説明し、就学前教育の重要性について周知する。高齢者学級講座で“しみず「教育の四季」”の実績を報告して、子どもたちの健全育成への理解と協力を求める。町内保育所、幼稚園、小中高から子どもたちや教職員の「ちょっといい話」を集約し、各所属所へ配布するとともに町のホームページに掲載し、清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信する。

今後の課題

- ・子どもたちの実態として 家庭での読書の時間が少ない 家庭学習の時間が少ない テレビ・ゲームの時間が長い 身の回りの整理整頓が苦手とする子が多いことがあげられます。家庭学習の習慣化や読書の時間の確保については、家庭と学校の連携を取りながら定着を図る必要があります。
- ・町民総ぐるみの教育活動を展開するために、各町内会組織及び各種団体等への浸透を図っていくことが大切です。
- ・地域・学校・家庭が互いに協力し合い、子どもたちを守り育てるという共通の目標と一連の活動の評価と情報をみんなで共有していくことが大切です。

今後の対応策

- ・“しみず「教育の四季」”の町民全体への浸透を図る取組に努めます。特に、高齢者学級生や町内会関係者等への啓発を積極的に行います。
- ・第7回「子どもフォーラム」を実施します。町内各小中学校児童会・生徒会及び高等学校生徒会の“しみず「教育の四季」”の取組を発表するとともに、各種団体代表者等からの意見を聞き、今後の方向性を明らかにします。
- ・幼保・小連携事業と連動して、保育参観や参観日での講話等をとおして就学前の教育の充実・発展に努めます。
- ・学校を基軸として、保護者と地域住民が相互に協力し合える体制づくりに努めます。そのためにも清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信していきます。

学識経験者の意見

家庭・学校・地域が一体となって、子どもたちの基本的な生活習慣の定着を図るため、リーフレットの家庭への配布や「子どもフォーラム」の開催など、様々な取組を行い、“しみず「教育の四季」”を推進しており評価できます。

今後は、課題を解決するために、「いつ、どこで、だれが、何をするのか」など、具体的な対応策を示し、町民全体の共通理解の下、町総ぐるみで“しみず「教育の四季」”が一層推進されることを期待します。

教育の四季は各学校の経営の中に位置づけられ、また、子どもフォーラムの実施などでかなり浸透しているようです。学校教育と直接関わっていない家庭に向けては、町内会活動や広報などにより、更に広める必要があると思います。

全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組

現状と成果

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、小学6年生及び中学3年生の全児童生徒を対象とする全国学力・学習状況調査が本年度は、従来の国語と算数・数学に理科を加えた3教科で4月17日に実施されました。本年度は抽出調査及び希望利用方式でしたが、本町の小中学校も全校が実施しました。

文部科学省は8月8日にその調査結果を発表しましたが、本町における教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）の平均正答率は、小学校・中学校とも北海道及び全国平均を上回ることができ、多くの児童・生徒が概ね学習内容を理解し、全体的に基礎・基本の定着が図られ、それを活用することも身につけているようです。しかし、調査結果から指導改善の必要な課題が見られ、なお一層、指導の工夫改善等を図る必要がありました。また、学習状況に関する調査では、全国に比べ基本的な生活習慣が身につけており、自尊意識・規範意識が高い傾向にありました。

これらの調査結果を踏まえ、教育委員会として学校改善支援プランを作成し、町のホームページで公表しました。また、各学校に学校改善支援プランを示し、各校においても調査結果を生かした今後の指導について具体的方策をまとめ、保護者にお伝えするとともに、放課後や夏冬休みの学習機会の確保など学習支援の工夫をしたところです。

今後の課題

- ・本調査で測定できるのは、一部の学年と学力の一部ではありますが、調査結果を受けて各学校で学力・学習状況を把握・分析して、教育の成果と課題を継続的に検証し、学習指導の工夫・改善に役立てていく必要があります。
- ・本町は家庭での学校の授業の予習・復習について、小学校と中学校とも「している、どちらかといえばしている」と回答した児童生徒が全国や北海道に比べ多い傾向がありました。家庭学習習慣は概ね定着しており、その中でも基本的な生活習慣が身に付いて、自尊意識・規範意識が高く、学習に対する関心・意欲のある児童生徒については、教科に関する調査の正答率が高い傾向にあります。

このことは、これまで取り組んできた小学校低学年の少人数学級、幼保・小連携の施策や“しみず「教育の四季」”などの実践が影響していると考えられるので、それらの施策の継続が必要となっています。

今後の対応策

- ・各学校との連携を図るとともに、小学校低学年における少人数学級の継続、幼保・小連携を重視した就学前教育の充実を推進し、児童生徒の学習意欲を高めるための学校の取組を支援していきます。
- ・規範意識の向上による学習習慣の確立や、基本的な生活習慣の育成を図り、学びに向かう姿勢の向上のため、“しみず「教育の四季」”の普及啓発を推進します。
- ・教員の資質向上については、学校教育課教育指導幹の学校訪問、外部講師の活用、十勝教育局指導主事派遣の要請、地域の人材による学習指導に関する支援体制を工夫していきます。

学識経験者の意見

全国学力・学習状況調査の調査結果を踏まえた学校改善支援プランを作成し、各学校における具体的な学習指導の改善方策を示すなど、児童生徒の基礎・基本の確実な定着に向けた取組の充実を図っており評価できます。

今後は、学習指導の支援の充実はもとより、学校・家庭・地域が一体となり、家庭学習を含めた望ましい学習習慣のより一層の定着を図るよう期待します。

ゆとり教育の影響などにより、学力の低下が全国的な問題になっています。学校週5日制について現状で良いのかなど、色々な機会を通して、論議されることを期待しています。

就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

現状と成果

平成 15 年度に「特区」を活用した小学校低学年における 20 人程度の少人数学級を具現しました。これは、生活集団と学習集団の一体化の中で、規範意識や躰、マナーの日常化を図るきめ細かな学習環境を整備するものでした。

その理念の延長線上に、就学前教育の充実の必要性を強く感じられたことから、町内の幼稚園・保育所と小学校のなめらかな接続を図るために、教育課程と保育計画とのつながり、教師と保育士との連携と研修、幼児と児童の学びと遊びの交流などの視点から調査・研究を進めました。調査・研究は、平成 17 年度から 2 カ年、道教委の委託を受けて、理念と実践とを指導機関の協力のもと進め、平成 19 年度以降は、2 年間の調査研究事業の成果と課題を踏まえ、無理の無い範囲で幼保・小のなめらかな接続を図る取組を継続実施しています。

具体的な取組は、清水地区と御影地区の 2 ブロックに連携推進会議を設け、幼児と児童の交流はもちろんのこと、教師と保育士との交流及び研修を通して互いに指導・援助の違いなどの共通理解を図り、発達や学びの連続性を重視した活動を行っています。

平成 24 年度は、ブロックごとの推進の協議、授業参観、児童と年長児の交流、職員間の交流、研修会の開催など昨年同様、積極的に実施しました。また、この取組が、更に小学校と中学校、中学校と高校との連携に発展しています。

今後の課題

- ・ 基本的な生活習慣や思いやりの心をはぐくむ教育活動を幼稚園・保育所、小学校が同じ目線で一貫した取組をしていくことが大切であり、教師と保育士との間の情報交流や相互理解を図るためにも幼保・小連携の継続的な取組が求められています。そのために、連携の取組を継続することの重要性を全体で認識し、交流活動のねらいや方法について改善を重ねていくことが大切です。
- ・ 連携を図るためには、保護者や地域の理解や協力を広めることも必要となります。

今後の対応策

- ・ 新しい保育所保育指針や幼稚園教育要領、小学校学習指導要領においても幼保・小連携が明記され、今後も重要な課題として位置づけられました。道内においても先進的な取組事例として高く評価をいただいているところですが、無理なく継続することが大切であり、清水町幼保・小連携協議会では連携の柱となる骨格を協議し、実践面の取組は各ブロック推進会議で担当教員を中心に連携を推進していきます。

学識経験者の意見

清水町幼保・小連携協議会の下、幼児と児童の交流はもとより、保育参観や授業参観の機会を設けたり、保育士と幼・小教員との合同研修会を行ったりするなど、組織的、計画的な取組を推進しており評価できます。

今後は、「連携」から「接続」への視点を明確にし、保育所・幼稚園と小学校が協力して、小学校入学当初の指導計画（スタートカリキュラム）の作成に取り組むとともに、保護者の不安を解消する啓発に努めるなど、子どもの生活や学びをつなぐ取組が一層推進されることを期待します。

幼保・小連携は極めて大切なことであり、教育活動がスムーズに継続されることが大切です。また、国民の三大義務と明記されている義務教育では、保護者の責任が大きく、その心構えをするためにも、子どもだけでなく、保護者同士の交流や連携も重要だと考えます。

「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組

現状と成果

食育については、「おいしい笑顔が見える給食」と「考える給食」を合言葉に、毎月発行の「給食だより」で、給食を通して児童生徒に正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身に付けさせるなど、食に関する指導の充実を図るとともに、地元産の食材を多く利用したメニューを取り入れています。

また、給食センターに隣接する試験ほ場の耕起作業などを関係機関の協力で整備し、栽培した野菜を小学校児童の給食センター見学の際に収穫体験させ、実際の給食に使用しました。

さらに、開町110年記念事業として給食メニューコンクール「食フェスタおいしさ110%」を実施して、町内小中学生から91作品の応募がありました。最優秀作品は実際に給食提供するとともに、書類選考された12作品のレシピ集を発行して内外に食育の情報を発信しました。

なお、独自メニューとして次の取組を行っています。

十勝清水の恵み給食～清水産の食材を使ったメニューとすることで、町内ではどのような食物が生産・加工・販売されているのかを理解することに役立っています。

食フェスタ受賞メニュー～食フェスタの受賞メニューの中から小学校6年生児童と中学校2年生の献立を、全国学校給食週間の一環として実際に提供しました。食フェスタの実施により地場産物と町内生産者への理解が深まり、給食献立作りへの子どもたちの関心も高まっています。

バイキング給食～小学校6年生、中学校3年生の卒業を祝うため実施していますが、継続を待ち望まれています。

今後の課題

- ・共同調理施設は、現施設が平成9年度に整備されてから16年を経過しており、調理設備の故障や器具・備品の傷みが激しくなっており、衛生管理面からも適切に設備や備品の更新を図っていく必要があります。
- ・昨年、道内の食品会社が製造した白菜の浅漬けを原因とする食中毒事故や福島第一原子力発電所の事故による食品中の放射性物質の問題などで、従来以上に安全で安心な給食提供が求められています。

今後の対応策

- ・地産地消の推進のため地元農業者等の連携を継続するとともに、地場産物を活用した献立を給食提供し、町内生産者への理解につながるよう児童生徒の興味関心を高め、感謝の心を養います。
- ・試験ほ場の収穫物を給食に活用することにより、野菜について考える給食を実践し、野菜をおいしく食べる工夫を図ります。
- ・既存の独自メニューを継続します。

学識経験者の意見

学校給食において、地場産物の活用を図るとともに、給食メニューコンクール「食フェスタおいしさ110%」などの取組をとおして、地域の産物や食文化の理解を推進しており評価できます。

今後は、給食の時間はもとより、各教科や特別活動等の教育活動全体をとおして、望ましい食習慣を身に付けることができるような取組を一層推進することを期待します。

食育を通して子どもたちに地域の実情を理解させることは、郷土愛や感謝の気持ちを養うことができるので、教育活動の中の重要な側面として大切なことです。

生活習慣を身につける生活向上推進事業

現状と成果

家庭におけるライフスタイルの変化により、人や社会との関わりが子どもに不足し、生活体験や自然体験の豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身についているといった調査結果が出ています。

この様なことから、児童期に「早寝、早起き、食事、挨拶、後片づけ、遊びなど」の基本的な生活習慣を身につけることが重要であると考え、事業を実施しています。

本年度は6回目の開催となり、昨年の事業反省をふまえ、清水小及び御影小の5年生以上各学校10名を定員に6泊7日の期間を設定して募集した結果、御影小から6名、清水小から3名の申込みがありました。

ここ数年、御影からの申込みが多く、清水からの申込みが少ない現象がみられましたが、継続して参加する児童が多い事が要因の一つになったと考えられます。

今回も職員7名と協力スタッフとして、高校生ボランティア1名、清水町女性団体連絡協議会より17名のご協力を頂き運営を行いました。

子どもたちはモデル的生活リズムでの生活により、普段体験することの少ない家事全般を体験し生活することの苦労を実感し、家族（お父さん・お母さん）の大変さを感じたようです。

今回の通学合宿には継続して2名が参加し、初めて参加する児童の良き模範となり、生活習慣に対する知識と経験を仲間とともに実体験することで更なる成果が得られたと感じました。

期間中は決められた学習や家庭での身の回りの行わなければならない事が多く、自由な時間はとても少ない環境でしたが、遊び時間を工夫の中から作り出していました。この過程にも仲間作りの効果が現れていました。

更に、研修終了後の保護者へのアンケート調査を行い、家庭での変化について調査しプログラム作成の参考にしました。

今後の課題

- ・通学合宿事業を継続した成果が見られることから、今後は体験事業を見直し、啓発事業へのシフトが望ましいと考える。

今後の対応策

- ・参加した児童が生活習慣として実践できるよう、保護者の理解と保護者自身の生活習慣の改善を求める取組を検討します。

学識経験者の意見

6年間にわたり、6泊7日の通学合宿を継続して行い、参加者や保護者に宿泊をともなう生活体験活動をとおして、今後の望ましい生活習慣形成のための意欲付けとなっており評価できます。

今後は、啓発事業への移行に当たっては、望ましい生活習慣が生き生きと学ぶための基礎であることを親子で認識して実践につながるよう、児童の体験事業や保護者の学習機会等を効果的に活用するなど、広報の一層の工夫が図られることを期待します。

小学校で実施したアンケートでは、「家庭で自分から後片づけができる」が保護者や児童の回答とも出ていないと回答している割合が「自分からあいさつできる」などより多いようです。責任を持って、きちんと後片づけが出来るなどの生活習慣の養成が強く求められます。

清水の子ども にこにこプラン事業の取組

現状と成果

清水の子どもにこにこプラン事業は、文部科学省が実施している放課後子ども教室推進事業に基づき、放課後や週末に子どもたちの安全・安心な居場所を設け、子どもたちが地域社会の中で心豊かで健やかに育まれる環境づくりを実施しています。

このプランは、文部科学省と厚生労働省が連携して設置している放課後子どもプラン推進事業に基づき、本町でも社会教育課と子育て支援課が連携して、カワウソ教室事業（放課後子ども教室推進事業） 学童クラブ事業（放課後児童健全育成事業） 連携活動（放課後、週末の団体活動）の3事業で実施しています。

カワウソ教室事業は、清水小学校の余裕教室を主会場に、学童クラブと連動して年間242日間実施しました。

参加児童は、清水地区は101人の登録者と学童クラブ児童がともに活動しました。

指導者は、コーディネーターを2名配置し体験プログラムを充実させると共に学童クラブや学校教員との連携連絡を密接に行いました。

学童クラブとの一体的な運営により、日常的な放課後の居場所として認識されています。そして保護者からは、学童クラブと共に放課後の居場所として理解され始めました。

今後の課題

- ・学童クラブと一体的に運営したことにより、プログラムが融合し多様な児童が常時参加することができました。反面その指導や健全育成に際し方針や方法に差異が生じ指導者関係が、戸惑いを感じるが増えつつあります。

今後の対応策

- ・活動内容においては、子ども教室の目的である体験活動等をさらに提供できるように、学童クラブ等と調整しながらプログラムを開発していきます。
- ・児童の指導・健全育成においては、学校教員と連絡を密にするとともに指導者の研修機会を充実していきます。
- ・健全育成の意識を地域と一体となって醸成するため、連携団体との情報交流を推進します。
- ・両事業対象児童に対して統一的な育成指導を図るため学童クラブが主体となって両事業を所管し、放課後児童の健全育成及び安全安心な居場所作りを行います。

学識経験者の意見

平成25年度に事業の所管を一元化することを想定し、カワウソ教室・学童クラブなど、学校との密な連携のもとに事業を推進したことは、指導者が同じ指針や目標のもとに指導できる体制を整えることとなり評価できます。

今後は、それぞれの事業のプログラム開発や指導者の研修の充実を図り、さらに具体的な成果をあげられますことを期待します。

地域全体で健全な子どもの育成を考えると、コーディネーターなど地域の教育力の結集が大切です。特に地域の人材を活かし、伝統文化を継承することは大切だと思います。

地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業

現状と成果

町民のボランティア意欲をまちづくりや生涯学習活動に活かす「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を平成14年度から実施しました。この事業は、個人が仕事や趣味で得た知識や技術を町民の学習活動に還元したいという方や、教育事業や教育施設に対して貢献したいという方を登録し、学習講師や活動支援として求める町内の団体・組織に派遣します。この学習成果の還元と人と人を結びつけることにより、互いに学び合える町づくりを促進することをねらいとした事業です。

社会教育分野での派遣要請は僅少であります。芸術分野等の専門性が求められるボランティアに対しての要請がありました。

登録者は、芸術文化やスポーツ、教養などの分野で62人おり、学校教育活動に対する支援者が多くを占めました。

ボランティア活動者が学校から表彰され、ボランティア意欲の喚起と、活動の評価につながりました。

このように、生涯学習ボランティア事業による町民の学習活動に対する支援の仕組みを構築した成果であり、協働の町づくりが着実に推進されている表れであります。

今後の課題

- ・継続したボランティア活動を活性化するためには、活動者や学校等の負担軽減と活動における調整者と手当てが必要です。

今後の対応策

- ・ボランティア意識を高めるために、活動が社会から評価される広報をします。
- ・新しい地域づくりのため、ボランティア活動を含めた人々の意欲と責務を喚起することを検討します。

学識経験者の意見

多くの登録ボランティアが、学校教育や社会教育の分野はもとより、豊かな地域づくりを目指して活躍され、特に、学校で活動を行ったボランティアに対し、表彰の機会を設け、活動へのさらなる意欲喚起を行っていることは評価できます。

今後は、登録ボランティアや登録してみたいと考える町民の活動を促進するために、ボランティア活動の成果を適切に評価し、成果を発信する広報活動を充実させるなど、住民による協働の町づくりが一層発展することを期待します。

子どもからお年寄りまで全ての人々が住みやすい地域を形成するために、豊富な知識や経験を活かした生涯学習ボランティア事業は重要だと思います。ボランティア派遣事業により良かったという人の声を取り上げるなどの広報や、色々な機会を通して、この大切さを話題にすることが大切です。

子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

現状と成果

図書館の読み聞かせボランティアとして平成4年に結成された『五月会』の会員は現在6名で、毎月第2、第4土曜日に図書館で行うお話し会のほか、小学校・幼稚園・保育所でのお話し会依頼に応じており、安定した活動をしています。

今年は、7月、9月、12月に特別お話し会の公演も行い、特に7月、12月は小学生が読み手として参加するイベントとして3年目となりました。(H24年度お話し会(12月末現在)16回開催、延べ275名参加)

今年度は図書館主催事業として読み聞かせボランティアの新規開拓を目指し絵本の読み方を学んでもらう講座を開設しました。

昨年度と今年度の開催をきっかけに、地域で紙芝居を読む活動を始めた方や、図書館の新規利用につながるなど少しずつですが効果が現れています。('読み聞かせはじめての一步'参加者7名)

今後の課題

『五月会』は安定した活動していますが、会員が増えているわけではないため、活動の停滞が心配されます。広報やPRチラシなどで会員の募集を随時行っていますが、読み聞かせの楽しさを体験してもらえようなきっかけ作りをする必要があります。

今後の対応策

- ・引き続き、読み聞かせ用の資料・情報提供などの活動支援を行います
- ・新たな読み手の育成につながる講座を継続して行うことで、潜在ボランティアの開拓につなげていきます。

学識経験者の意見

読み聞かせのボランティアを育成する講座の開設や、小学生が読み手として参加するイベントの実施など、子どもの読書活動を推進する取組が行われ評価できます。今後は、ボランティアの町内における資質向上の取組に加え、他市町村の実践事例や技術習得のための研修会への参加奨励や、学校・家庭・公立図書館・地域の団体・サークル等が連携した取組を促すなど、全町的な読書活動を推進する取組に期待します。

「五月会」の読み聞かせのボランティアは、非常に重要な活動だと思います。ゲームに夢中になっている子どもたちに、本に接する機会を広げることは大切であり、そのためにも、図書館ボランティアの現状を広く町民に伝え、活動の拡大と活性化を期待しております。